

独思録：「アカデミー賞、日本の2作品受賞」(3/1)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

今回の「オバマ政権がホワイトハウスに招いた初の外国首脳」とのふれこみで行われた日米首脳会談は、昼食会や共同記者会見もなく、オバマ大統領は、会見後、さっさと就任後初の連邦議会演説、取り残された麻生総理は正にピエロでした。

丁度その頃、同じアメリカでは、二つの日本映画がアカデミー賞の外国語映画賞と短編アニメーション賞を受賞し、面目を保ってくれました。このアカデミー賞二つの受賞がなければ、日米首脳会談がどのようにマスコミで扱われたか、ある意味、麻生総理は、幸運にも、アカデミー賞に救われたのではないかと思います。

寺田寅彦の作品に『映画芸術』というのがあります。その「映画と国民性」の項に、「すべての芸術にはそれぞれの国民の国民的潜在意識がにじみ出している。映画でもこれは「顕著に浸透（しんとう）している。アメリカ映画はヤンキー教の経典でありチューインガムやアイスクリームソーダの余味がある。ドイツ映画には数理的科学とビールのおいがあり、フランス映画にはエスカルゴやグルヌイーユの味が伴なう。ロシア映画のスクリーンのかなたにはいつでも茫漠（ぼうぼく）たるシベリアの野の幻がつきまとっている。さて日本の映画はどうであろう。数年前の統計によるとフィルム生産高の数字においてはわが国ははるかにフランスやドイツを凌駕（りょうが）しているようであるが、これらの映画の品等においてはどうか。たくさんの邦産映画の中には相当なものもあるかもしれないが、自分の見た範囲では遺憾ながらどうひいき目に見ても欧米の著名な映画に比肩しうるようなものはきわめてまれなようである。」という行があります。

当時の映画は、まだまだ、剣劇の股旅ものや幕末ものなど、チャンバラ映画が主流、しかも、歌舞伎芝居の因習の殻を尻に付けたままで、現在の社会をそのまま目の前に浮かばせるような、リアルで心を打つような映画は見たことがなく、チャンバラの果たし合いでも安芝居の立ち回りの引き写しで、現実味のない映画だったようです。

それ故、まだしも生活感のある、アメリカ映画にはヤンキー教の経典、ドイツ映画には数理的科学とビール匂い、フランス映画にはエスカルゴやグルヌイーユの味、更に、ロシア映画にも茫漠たるシベリアの野の幻があり、日本のチャンバラ映画は太刀打ちできなかったのでしょう。

しかし、今回アカデミー賞受賞の2作品も、当時とは異なり、日本の映画はこれだというのが確立されたと云うのではないと思われます。しかし、現在世界を覆っている、アメリカ発の金融破綻に端を発した世界不況の中で、社会の欠陥や過ちに痛めつけられている弱者、その中の最弱である死者や老人に対しての人間の心が、込められていたのが認められたのだと思います。

話によると「おくりびと」も「つみきのいえ」も、こうすれば良いというような、評論

家的な解決策を提案することではなく、困難さを指摘するより、人間への信頼を素直に表現し、重苦しい空気の中でも、無縁の人の死という尊厳に対する姿勢、老いという悲しく淋しい現実の中で発揮される優しさや愛、それが米映画人たちの心に響いたのではないのでしょうか。

< 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。



航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）などに所属、大正12年（1923）45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風などの調査に従事する。

「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

< おくりびと > <http://www.ielab.jp/okuribito/>

楽団の解散でチェロ奏者の夢をあきらめ、故郷の山形に帰ってきた大悟（本木雅弘）は好条件の求人広告を見つける。面接に向かうと社長の佐々木（山崎努）に即採用されるが、思いもよらない業務内容を告げられる。

それは「納棺」、遺体を棺に収める仕事だった。

戸惑いながらも、妻の美香（広末涼子）には冠婚葬祭関係の＝結婚式場の仕事と偽り、納棺師の見習いとして働き出す大悟。美人だと思ったらニューハーフだった青年、幼い娘を残して亡くなった母親、沢山のキスマークで送り出される大往生のおじいちゃん…。さまざま境遇の別れと向き合ううちに、大悟は納棺師の仕事に誇りを見いだしてゆく。

監督滝田洋二郎、脚本小山薫堂。



<つみきのいえ>

映画『つみきのいえ』は、繊細かつ独創的な世界観で注目を集めるアニメ作家・加藤久仁生のハートウォーミングアニメ。

上へ上へと建て増しを続けてきた「積み木」のような家に住むおじいさんの家族との思い出の物語。海外でも評価が高い加藤久仁生作品。ナレーションは女優・長澤まさみが担当。



春秋：「アカデミー賞」(2/25)

事改めて言うと、日本の「おくりびと」が受けた賞は外国語映画賞であって外国映画賞ではない。インドの俳優を英国人監督が演出した英国映画が作品賞、監督賞はじめ米アカデミー賞の8部門を独占できたのは、外国映画だけれど外国語映画ではないからだ。

その「スラムドッグ\$ミリオネア」はインド人外交官が書いて、世界37の国で翻訳された小説「ぼくと1ルピーの神様」を原作にする。月給900ルピーの貧しい青年がテレビのクイズショーに出て10億ルピーもの賞金をかちとった。貧民街で育ち何の教育もない彼が難問を解けたのには驚くべき秘密が と展開する。

「舞台」になったクイズは日本でもおなじみの、司会が「ファイナルアンサー？」と念押しをするあれだ。小説を読むと、インドでは「絶対の、100パーセントの自信がありますか？」と尋ねるらしい。そういう細かな違いはあるにせよ、同じような番組が80カ国以上で人気なのだという。

米国発の金融危機が、瞬く間に世界同時不況になり、昨日は、NY株の大幅安を受け東京市場でバブル後最安値を一時割った。経済のグローバル化を文字通り痛感する日々だが、今年のアカデミー賞を制覇した映画は、文化や芸能、人々の楽しみなど、経済のほかでも国境は溶けだしていることを教えてくれる。

<スラムドッグ\$ミリオネア>

インド、ムンバイのスラム街で生まれ育った無学の少年ジャミールは、クイズ番組「クイズ\$ミリオネア」で最終問題までたどり着き、一夜にして億万長者のチャンスをつかむが、不正を疑われてしまい……。インドの外交官ピカス・スワラップが執筆した小説を、「フル・モンティ」のサイモン・ポーフォイが脚色。「トレインスポッティング」のダニー・ボイル監督が全編インドで撮影した、スラム育ちの少年の人生を描いたドラマ。第81回アカデミー賞で作品賞、監督賞ほか8部門を受賞した。



天声人語：「二つの日本映画」(2/24)

人の遺体を扱った詩歌は多くないだろうが、甲州に暮らした俳人、飯田蛇笏(だこつ)になきがらや秋風かよふ鼻の穴 がある。山あいの村の甲いだろうか。死者の湛(たた)える静けさが、透きとおった風とともに、読む者の脳裏に浮かび上がる。

映画「おくりびと」を見て、似た思いを抱いた人もいることだろう。「死に対する畏敬(いけい)の念を通して生をたたえる感動作」と米国の映画業界紙が評したそう。きのう、アカデミー賞の外国語映画賞を、日本映画として初めて受賞した。

遺体を清めて棺に納める「納棺師」という職業を描いている。装束を着せ、化粧も施す。いつくしむような所作を通して「人の尊厳」がにじみ出る。難しい役を、主演の本木雅弘さんが好演した。

映画作りにあたり、本物の納棺師、青木新門さんの著書『納棺夫日記』を読み込んだそう。毎日死者ばかり見ていると死者は静かで美しく見えてくる」と青木さんは書いている。「生か死か」ではなく、生と死を一つとして見るのが大切だと、心のありようも説く。

英語版の題名「デパーチャーズ」は「旅立ち」の意味である。生者が「おくりびと」なら死者は「おくられびと」。送り、送られて歳月は流れる。テーマの普遍性が、前評判の高かったライバル作をしのいでの栄冠を呼び込んだようだ。

もう一つの朗報となった短編アニメーション賞「つみきのいえ」も、ひとりの老人の、過ぎていった人や時への愛惜を描いている。二つの日本映画に、人が生きて紡ぐかけがえないものへの、深いまなざしを見る。

< 飯田蛇笏 (1885- 1962) >

俳人。本名、飯田武治。別号、山廬。

山梨県東八代郡五成村(現笛吹市)生まれ。早大を中退。在学中早稲田吟社の句会に参加。若山牧水らとも親交を深め、高浜虚子の主宰する『ほととぎす』投稿。

1914年愛知県幡豆郡家武町(現西尾市)で発刊された俳誌『キラ』の選者を担当。1917年、同誌の主宰者となり、誌名を『キラ』から『雲母』に改める。1925年に発行所を甲府市に移す。

1932年処女句集『山廬集』を出版。故郷・境川村で俳句創作活動を死ぬまで続ける。忌日の10月3日は「山廬忌」という。



編集手帳：「鎮魂の儀式」(2/24)

弔問のあいさつはむずかしい。頭を下げ、聞き取れないほどの低い声で、「黒足袋(くろたび)、白足袋(しろたび)」と言え。作家の吉村昭さんはそう教わったという。

すべての弔問客が言語明瞭(めいりょう)に悲しみを語れば、聴く遺族の心身がもたない。無意味なつづやきもときには思いやりだろう。葬礼とは死者の霊を鎮める「鎮魂の儀式」であるとともに、残された生者を皆でいたわる「絆(きずな)の儀式」でもある。

女性を殺して遺体を無残に切断した男に先週、東京地裁で無期懲役の判決(求刑・死刑)が言い渡された。死刑が相当かどうかは殺した後の残酷さではなく、殺すまでの残酷さで判断するのだという。

法解釈はともかくも、判決からは遺族に寄せる「黒足袋…」程度のいたわりも感じることができない。わが子を切り刻まれ、下水に流された親は明日をどう生きればいいのかだろう。

折しも、遺体をひつぎに納める納棺師を主人公に、死を通して命の尊さと人の絆を描いた映画「おくりびと」(滝田洋二郎監督)が、米国アカデミー賞・外国語映画賞に輝いた。本木雅弘さん演じる納棺師のおごそかな、いたわりの所作が眼底によみがえる。

< 吉村昭 (1927-2006) >

小説家。東京府北豊島郡日暮里町(現在東京都荒川区東日暮里)生まれ。

学習院大学文政学部文学科除籍。在学中文芸部委員長になり、短篇を『学習院文藝』改称『赤繪』に発表。丹羽文雄主宰の同人誌『文学者』、小田仁二郎主宰の同人誌『Z』などに短篇を発表。1958年2月短篇集『青い骨』を自費出版。6月『週刊新潮』に短篇「密会」を発表して作家デビュー。



『戦艦武蔵』『破獄』などの作品を著し、芸術選奨文部大臣賞、日本芸術院賞はじめ数々の文学賞を受賞。

他に『星への旅』『戦艦武蔵』『陸奥爆沈』『関東大震災』『深海の使者』『ふぉん・しいほるとの娘』など。

余録：「アカデミー賞同時受賞」(2/24)

「Vocuri」とは17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ=送り」の表記である。語釈には「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。そして「送りをする」「送りに参る」の用例がある。

二つの用例はそれぞれ「埋葬する」「葬式に行く」と説明されている。旅立つ人に途中まで付き添っていく「送る」という言葉を、古くから死者を葬るのに用いた日本人だ。その死生観はポルトガルの宣教師たちの関心を引いたに違いない。

死者の納棺を職業に選んだ主人公を描く滝田洋二郎監督の映画「おくりびと」が米アカデミー賞外国語映画賞を日本作品として初受賞した。日本人の死生観、人のきずなを描いた映像の力が、宗教や文化の違いを超えて人の心をつかんだのだ。

アカデミー賞は主にハリウッドの映画関係者によって選ばれるという。すでに内外の映画賞や映画祭グランプリに輝いてきた「おくりびと」だ。しかし常に国境を越えた世界相手の映像作りに挑む映画人からの高い評価はまた格別であろう。

生と死といった日本人の心の最深部に表現のおもりを垂らすことで、かえって世界中の人に通じる感動の鉦脈を掘り当てることもあるのが芸術である。同じようなことは、お家芸のアニメ「つみきのいえ」で短編アニメーション賞を初受賞した加藤久仁生監督にもいえるに違いない。

「映画は言葉を超えることを実感した」という滝田監督、「ありがとう、アニメ」と語る加藤監督である。その映像にひそむパワーを世界に向けて解き放つのは、作り手の「獨創性」であることを改めて示してくれた両受賞作だった。

< 滝田洋二郎 (1955-) >

映画監督。富山県高岡市出身。

富山県立高岡商高校卒。1974年獅子プロに助監督として入社。

1981年『痴漢女教師』で監督デビュー。1985年一般映画『コミック雑誌なんかいない!』で注目され、その後、コンスタントに話題作を発表。

2001年の『陰陽師』がヒット、2004年の『壬生義士伝』で日本アカデミー賞最優秀作品賞受賞。

2008年公開の『おくりびと』で、翌2009年の日本アカデミー賞で最優秀作品賞・最優秀監督賞を獲得。今回の第81回米国アカデミー賞で外国語映画賞を受賞。



< 加藤久仁生 (1977-) >

アニメーション作家。鹿児島県鹿児島市出身。

多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。在学中にアニメーション作品で国内の賞を獲得。卒業後、2001年に映像制作会社ROBOTに入社、キャラクター・アニメーション部アニメーションスタジオケージに所属。



テレビ番組、Web アニメーション、スポット CM などのアニメーション作品を手がる。

2008 年『つみきのいえ』で世界最高峰のアヌシー国際アニメーション映画祭アヌシー・クリスタル賞（最高賞グランプリ）を獲得。

2009 年、『つみきのいえ』が第 81 回アカデミー賞の短編アニメーション賞を受賞。短編アニメーション賞の受賞は日本人監督作品で初。